DALS ニューズレター　No. 7

死生学

東京大学
２１世紀ＣＯＥプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

２００４年１０月１日

目　次

巻頭エッセイ「道の分かれ目」
西平直

シンポジウム「死者と生者の共同性」を振り返って
関根清三

シンポジウム「死生観とケアの現場」第一部　所感
下田正弘

シンポジウム「死生観とケアの現場」第二部 報告
竹内整一

松尾剛次特任教授講演会　前半 報告
末木文美士

松尾剛次特任教授講演会　後半 報告
菅野覚明

2004 年秋のシンポジウム・研究会　予告

ロジャー・クリスプ氏講演研究会　「医療資源の配分、QALYs か徳か？」

講演研究会「医療とスピリチュアリティ」
島薗進

シンポジウム「べてるに学ぶ ―《おりていく》生き方」
上野千鶴子

シンポジウム「生死をめぐる同意と決定」
一ノ瀬正樹

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku

巻頭エッセイ「道の分かれ目」

西　平　　直

子どもの頃、ほとんど本を読まなかった私が、なぜかよく憶えている話。およそこんな筋だった。

親を亡くした三人の兄弟が旅に出る。村のはずれまで来ると、道が三本。ではここで分かれよう。長男は右、次男は真ん中、三男は左、それぞれ別の道を行くことになる。

長男は、その旅の途上、縁あって役人に拾われ、地道な努力を重ねたあげく、当代きっての判事になる。次男は、何の因果か、盗賊の世話になり、持ち前の機転の良さから、これまた名の知れた賊首となる。三男は、たまたま大店に拾われ、めでたく当家の娘と結ばれ、こちらは名の知れた長者となっている。

さて、場面が変わって、ある夜更け、この長者の家に賊が押し入り、大捕り物の末、召し捉えられ、判事の前に突き出される。

「面を挙げよ・・、よもやお前は・・」と、およそ、こんなストーリーである。

かなり後年になってから、実はこれが菊池寛の小説「三人兄弟」であったらしいと知ったのだが、なぜか、私の中では、ロシア民話の色彩のまま記憶に残っている。

子どもの私は、どういうわけか、繰り返し、この話のことを思った。まず考えたのは、この三人の内、自分は誰に一番近いかということだった。賊首を務める度量はないし、判事になる力量も見込めず、やはり大店の後とり娘を待つしかないのだろうか、と思ったりした。

しかし、それより気になったのは、「分かれ目」の怖さだった。出発点におけるほんの一歩の違いが、時の流れの中で、これほど大きな違いに広がってしまう。それは不思議である以上に恐怖として感じられた。ほんの一歩の違いが、結果的には、決定的な違いに繋がる。そして、取り返しがつかない。

では、どの道を選べば良いのか。その指針のなさが怖かった。怯えるに近かった。人生の冒険とか、運命への挑戦といった若々しい言葉とは、およそ縁がなかった。

更に思ったのは、この兄弟たちは、出会って幸せかということだった。もし出会うことなく、そのまま別々の道を進んでいたのであれば、三人とも、互いのことは知らないまま、自分の道だけ歩いていた。なまじ出会ってしまったから、その立場の違いに驚愕する。出会わない方が、よかったのではないか。しかし、やはり、辛いとしても、再会は喜びなのか。むしろ、苦しむからこそ、一瞬の喜びが鮮やかになる。

作家という人たちは、そうした一瞬の輝きを作り出す意地悪な人に思えた。そんな輝きなど知らないほうが、穏やかでいられるのではないか。切なさと引き換えに輝く一時（いっとき）のまばゆさ。自分の心がそこに惹き付けられているとも知らぬまま、こういう話は意地悪だと思っていた。

以来、人生とか、運命とか、偶然とか、物語とか、そうした言葉に惹き付けられては反発し、離れすぎては後悔し、文学に進むことも、神学に進むことも、哲学に留まることもできないまま、所詮学問に何が分かると反抗し、言葉から身を引き剥がせと荒れた文字を書き連ね、もはや、半分やけっぱち、半分いいかげん、願わくば、諦念を底に秘めた遊び心に至らんことを念じつつ、もうしばらくこのまま、自分の道を歩いてゆくしかないのだろう。

シンポジウム「死者と生者の共同性」を振り返って

関 根 清 三

昨秋（2003 年 11 月 28・29 日、於東京大学文学部 1 番大教室）内外からの講師をお招きして催されたシンポジウム「死者と生者の共同性」は、本ＣＯＥにとって、意義の深い研究会議の一つとなった。遅れ馳せながら、その報告をせよとの、編集部からの要請なので、当時の覚書をもとに、思い出すことを記しておきたい。

28 日（金）午後は、1 番大教室を満たした約 120 名の聴衆を前に、まず稲上毅・人文社会系研究科長から、最近ご母堂を亡くされた経験に言及した心に残るご挨拶をいただいた。続いて総合司会の関根清三（以下、特に断らない場合は本学大学院人文社会系研究科所属）が、かつて祖先崇拝の思想を日本人の美徳としたラフカディオ・ハーンを引いて、現在の日本人の傾向と諸文明の比較を旨とする、このシンポジウムの趣旨について述べた。ヨーロッパの個人主義的傾向を批判して、和辻哲郎等が他者との共同性に注目した時、他者は空間的な生者に限られていたのに対し、このシンポジウムでは時間的な過去の他者、すなわち死者に注目するという課題が確認された。こうした趣旨に沿ってシンポジウムは、3 部から構成された。

第 1 部は、「現代哲学は死をどう主題化してきたか」というテーマで進められた（司会・松浦純教授）。ウィーン大学の Ｇ・ペルトナー教授が、「現代の哲学的な死の理解の諸相」と題して重厚な基調講演をされた。来世や輪廻等を想定した形而上学的な死についてもはや語ることをせず、無として死を捉える傾向を指摘して、参加者に感銘を与えた。続いて関根がコメンテータとして、現代のハイデッガー的な無が、西洋の伝統的な非存在や東洋の絶対無とどう関係するか、またそのニヒリズムの哲学が切り落としがちな他者問題を掬い取って、生者の記憶の中に生き続ける死者との共同性についてどう考えるかといった問題を指摘した。フロアーからも活発な質問と、それに対するペルトナー氏の丁寧な応答があり、充実した第 1 部となった。夜はフォレスト本郷に場所を移して懇親会が催された。

ペルトナー教授

第２部の様子

明けて 29 日（土）は雨にもかかわらず前日とほぼ同数の聴衆が集まり、先ず総合司会の方から 1 部と 2・3 部の関係について要約がなされた後、午前中、第 2 部のシンポジウム「諸文明における死者と生者」へと進んだ（司会・池澤優助教授）。プリンストン大学の Ｓ・タイザー教授と、総合文化研究科の宮本久雄教授が発題を担当された。タイザー教授は、スライドを多用して仏教における死の幾何学について語り、宮本教授はヘブライ的なハヤトロギアという氏固有の観点から、現代における象徴的な意味での死（例えば無権利な難民）と生（難民共同体）の間に立って祝祭的空間をいかにして創出するかについての構想を提示され

た。コメンテータは東文研の関守ゲイノー助教授と塩尻和子筑波大学助教授が担当され、それぞれ修験道やイスラム思想という御専門の領域との関わりで論じられた。

29 日午後は続いて、第 3 部のシンポジウム「死者と生者の現在」が開催された（司会・末木文美士教授）。パネリストは渡辺裕教授、渡辺哲夫東京医科歯科大学教授、J・フォード・アリゾナ州立大学教授であり、それぞれのコメントは菅野覚明助教授、F・ランベッリ札幌大学教授、川村邦光大阪大学教授が担当された。渡辺（裕）氏は、葬送行進曲やレクイエムの演奏を流しながら、西洋音楽にみる死生観の「近代」について語られた。コメンテータからは政治との関わり等が問題とされた。渡辺（哲夫）氏は、父親を殺した統合失調症の患者の例を引いて、生者と生者の共同性という表層ではなく、生者と死者の共同性という深層にまで遡らないとカタストローフに陥るとして、精神病理学的視点から現代に警鐘を鳴らした。しかし生者と生者の共同性を表層と断ずる理由は何か等が問題とされた。最後にフォード氏は、ホロコースト・ヒロシマ以降、無意味な大量死の意味づけは、死者に近しい生者の記憶において将来そのような大量死を防ぐ手立てとする以外にないであろうという見通しについて語られた。しかしあれは大量死ではなく大量殺人というべきではないか等の疑問も出された。最後に拠点リーダーの島園進教授が、このシンポジウムに集った全ての方々、特に発表と討論の労を取られた先生方、また準備期間から当日の運営まで献身的に働かれた COE 特任研究員たちへの謝辞を述べて、盛大な拍手の中に閉会となった。

第３部の様子

第 1 部で現代のニヒリズム哲学の視点から、来世といった形而上学的な死について語る語り口を放棄したらどうなるかという問題提起に始まった本シンポジウムは、第 3 部に至って、理不尽な死を遂げた人々を初めとする、近く遠くの死者たちを記憶し、自己の歴史的出自に思いを致す、そういう生者の死者との共同性という方向に、ニヒリズムを超克して行く 1 本の道を見出して、或る円環を結んだように思われた。

2 日間の共同の探求の一里塚をこの辺りに見出し、〈これを作業仮説として、またそれぞれの研究の場に持ち帰って更なる吟味を加え、ここに端緒についた共同の探求を今後もまた連携しながら深めて行きたい〉、という主催者側の決意を、1 年前の学内広報の報告に書いた。2 日目の夜の打ち上げでの内外のパネリストの感想や、聴衆のアンケートに拠っても、そうした思いは多くの参加者に共有されていた印象をもったからでもある。その後 1 年を経て、そうした共同の探求は、客員教授の招待や向こうでの講演・講義から、メールでの個々の問題についての意見交換に至るまで、様々なレヴェルで継続している。いずれまた、その成果を COE の場で発信していければ、と念じている。

シンポジウム「死生観とケアの現場」所感

第一部研究集会「死生のケア・教育・文化の課題」

下　田　正　弘

開催：２００４年6月１２日　9:30～17:45　於東京大学文学部 法文２号館 教官談話室

死にゆく過程は旅のようなものである（アラン・ケリヒア）。旅が終わったときには旅はもうそこにはない。死が過程であり旅であるとするなら、それは無ではなく有であるよりほかはないだろう。

生命全体をかんがえても、ひとの歴史を振りかえってみても、たしかにこの想定は突飛ではない。ひとつの生物種が絶たれたかにおもわれたとき、そこにはべつのあらたな種が誕生している。ひとが死んでも魂は死なず、思想は生き延びる。多くの死を潜りぬけた種が種としての力をそれだけ増しているように、歴史のなかに受けつがれた民族の情念は無となるはずの親世代の死をとおして、より強固で鮮明な有として生まれなおしていく。

眼前のやっかいな問題を暴力や死によって消し去ったとおもうのは手品師のマジックを信じこむ程度の錯覚でしかない。有は死によって無となるはずはなく、死をとおしてかえって増大しさえする。いかなる観点からであれ、死をとらえようとして終止点としての死に注意を向けるのは、手品師が一点に注意を集めて詐術にかける手合いに乗るようなものだろう。幻術舞台の観客になるのではなく現実のただなかに立つものにとって、宗教的であれ医学的であれ、死の瞬間や意味づけなどは用がない。死によってさえ清算されようのない問題が存在しつづけること、そのことこそが動かしようのない問いである。

この研究集会を終え、看護と教育とがこれほど近しい関係にあったことにあらためて驚きをおぼえた。ホスピスのなかの患者、教室のなかの子供、そのいずれもが同じ問い――いかにみごとに捏造されようと観念的な死によってはけっして終わるはずのない問い――のまえに立たされ、心底、慄いている。看護であれ教育であれ、こうした他者への視線はつねに自己に反照され、問い自体に自己自身が権化してゆかざるをえない。

すくなくともこの地点にまでいたるなら、死生を文化として論ずる余裕はない。この問いをまえにしてわずかでも力になりえるものがあるとするなら、問いに向かい合う真摯さだけであろう。じっさい、看護や教育の立場からの発言はこの難問をわずかに温め、あるいは動かしさえする予感を与えてくれたのにたいして、文化を論じた声はこの問い自体を、幻術師よろしく、どこかに雲散霧消させてしまった、そんな勝手な感想をいだいた。

シンポジウム「死生観とケアの現場」報告

第二部研究集会「死の臨床と死生観」

竹　内　整　一

２００４年６月２６日、本郷キャンパス医学部大講堂において、公開シンポジウム「死の臨床と死生観」が開かれた。これは、本プロジェクトと人文社会系研究科「応用倫理教育プログラム」との共催のシンポジウム「死生観とケアの現場」の第２部として開催されたものである。

パネリストは、広井良典・千葉大学教授（科学哲学）、森岡正博・大阪府立大学教授（生命学）、柳田邦男氏（作家）、若林一美・山梨英和大学教授（教育学）の４氏で、コーディネイター・司会は、本プロジェクトの竹内（倫理学）が務めた。

シンポジウムでは、まず広井氏が、「死ねば無になる」といったような言い方に代表されるような「死生観の空洞化」現象が現代日本には蔓延している、と、それは、神や仏といった存在へのセンスの無化・抽象化とパラレルの事態である、と指摘し、戦後、とりわけ高度成長期以来、日本人が次々と脇にやり忘れていった原神道的、仏教的な死生観の深層を掘り起こすことによって、何らかの意味で「たましいの帰っていく場所」としての死を、それぞれの仕方で見出してゆくことが大切だ、と提言した。

これを受けるかたちで森岡氏は、自分は死後の世界を信じていない、死んだら無になるというのが一番ぴったりくる感覚であるとして、そのような感覚を持つ人々がどのようにしてこの世との離別を果たせばいいのか、またそうした人々にどうケアしうるのか、といった問題を投げかけ、肝心なのは、死後の世界ではなく、死んでもなお続いていくであろうこの世との和解成立の可能性ではないか、と、持論の「無痛文明論」を踏まえて「死後の世界を信じられない者の死生観」を展開した。

また柳田氏は、我が子を亡くしたみずからの体験や多くの闘病記などを踏まえ、一人ひとりが死を前にして自分自身の人生を完成・完結させることが大切だ、そうすることによって死の納得というものが成り立ってくる、現代は一人ひとりが自分の死の物語を創る時代だ、と、またそのためにも、死を何人称から見るのかという、人称性の視点をこまやかに取り込む必要がある、と、「「物語を生きる人間」医学」を提唱した。

そして最後に、子供を亡くした親の会「ちいさい風の会」を主宰してきた若林氏は、「遺族の悲しみ」というテーマで、泣きたいときに泣けない社会のなかでこそ、人は身も心も病んでいくのだと、悲しみを通して見えることが何と多いことか、そうしたことに対して我々は何と無頓着であるか、と訴え、苦しみや悲しみの根源そのものが、その人に生きる力を与えるのだ、と多くの具体的な事例を踏まえ報告した。

以上４氏の提題を受けて、討論では、１、死生観・形而上学・宗教性の捉え方、２、「物語」の位相、３、死生観を踏まえてのケアのあり方、４、悲しみの可能性、の４点に分けて議論された。２時に始まったシンポジウムは４時間におよび、６時前に閉会されたが、定員三百人を大幅に上回りいっぱいになった会場からも、多くの意見・質問・感想が寄せられ、「死の臨床と死生観」というテーマへの関心の高さがうかがわれた。

松尾剛次講演会 前半 報告

末木文美士

松尾剛次特任教授講演報告（7 月 6 日 5:00－7:00、219 教室）
論題：「死の中世――官僧・遁世僧モデルの立場から」

松尾剛次特任教授

本講演では、松尾氏の持論である官僧・遁世僧モデルの立場から、僧侶と葬送とくに死体との関わりなどに関して触れ、鎌倉時代に生まれた仏教の新しさについて具体的に論じた。

講演の前半では、これまでの鎌倉仏教の研究史の上に立って、氏の持論とする官僧・遁世僧モデルがどのように位置付けられるかを概観した。通説 A（鎌倉新・旧仏教論）は戦後大きな力を持ったが、その後の研究の進展に伴い、通説 B（顕密体制論）が主流となった。しかし、通説 B では中世仏教の実態を必ずしも明らかにできないところから、官僧と遁世僧のダイナミックな関係を中核に置く氏の官僧・遁世僧モデルが生まれた。

講演の後半では、この立場に基づいて、特に遁世僧たちが庶民の葬式を行なったことを取り上げ、それが日本人の死生観の確立に大きな影響を及ぼしたことを、史料に基づきながら論証した。遁世僧は、官僧（官僚僧）身分を離脱することにより、穢れの観念からも自由になり、葬式など官僧にとって制約のあった種々の活動に従事した。それにより、従来貴族などの限られた範囲にしか及ばなかった仏教による死後救済が、広く行なわれるようになり、「個」の救済としての仏教の役割が一層大きくなった。

約 1 時間の講演後、後半の時間は討論に当てられ、さまざまな意見や質問が出された。例えば、以下の通り。

・死後の救済と死体の処理という二重の問題として考える必要がある。
・死穢とともに、産穢についても考える必要がある。
・インドの場合も、密教になると、葬式儀礼が発展する。
・近世の家の宗教としての葬式仏教とのつながりがこれからの課題。
・行基・空也・時宗などの活動をどう見るか、検討が必要。

松尾剛次特任教授講演会　「死生学と中世律僧」後半 報告

菅　野　覚　明

松尾剛次特任教授講演報告（7 月 6 日 17:00－19:00、316 教室）
　論題「死生学と中世律僧」

　本講演では、中世遁世僧の独自性が、死者の救済、葬送体制の整備、死生観、死の美術等々の関わりを通して論じられた。
　まず、中世仏教の実態を、官僧と遁世僧の共生・分業・対抗関係として捉える考え方が示され、西大寺律宗の事例をもとに、遁世僧の活動の独自性が、官僧との関係においてどのように担保されていたかが述べられた。さらに、律僧たちの遁世僧としての独自の活動の中心に、葬送への積極的関与があることが示され、光明真言会の創始、斎戒衆の組織、非人の統制などの具体事例を挙げながら、律僧と死者との関わりの諸相が示された。律僧の律僧たるゆえんである「戒律」の清浄性をめぐって、それが古来官僧にとってのタブーであった死穢の怖を容易に克服する根拠となったこと、死体を扱う呪術・技術によって、不浄な存在とされてきた死者を尊重すべきだという観念をもたらしたこと、五拾塔・舎利瓶等々の死の美術の創造にも重要な役割を果たしたこと、等々が指摘された。
　１時間強の講演に引き続き、討論が行われ、死体の「尊重」とは何か、死体を恐れる心性は本質的に「尊重」ではないのか、また、遁世僧出現以前における、官僧周辺以外の葬送の実態を探求すべきである、等々の意見・議論が活発に交わされた。

ロジャー・クリスプ氏講演研究会
"How to Allocate Health Care Resources:QALYs or the Virtues?"

"How to Allocate Health Care Resources:QALYs or the Virtues?"
（医療資源の配分、QALYs か徳か？）
２００４年１０月１４日（木）　１５：00～１７：00
東京大学文学部法文１号館　２１５教室

内容紹介

本稿は、ある社会における医療資源の分配の問題を論じる。この課題の一般的な性質と英国における現状が、まず分析される。次に一つの答えとして、「質で調整した生存年」（QALYs :quality-adjusted-life-years）を最大化する分配の追求という考え方が説明される。この理論の背景には人間の幸福に関する哲学的な前提があり、この前提にまつわる想定しうる難点が議論される。そして「QALY 理論」を用いて、効果とコストの観点から個々の治療法を調べて、どのようなコストがうけいれられるかを明らかにする。また、今日の英国で QALYs が実際に用いられ、生死をめぐる医療的処置の意思決定にいかに活用されているか報告する。さて、「功利主義」という名で知られている哲学的理論は、最大の善をもたらさなければいけないと主張するが、QALY の考え方はこの功利主義の系譜上にある。そこで次に、その連続性を示そう。さらに QALY 理論を徳との関係で考察する。この理論は（慈愛の徳を看過するものではないとしても）正義の徳を軽視するところがあるかもしれない。そこで正義を分析することになる。最後に結論として、医療的処置の場合には、多様な要素を含む意思決定の熟考を迫られるので、その際「実際的な知恵」という徳が、中心的なもののひとつとして必要になることを主張する。

（翻訳　麻生享志）

講演研究会「医療とスピリチュアリティ」予告

島　薗　進

下記のように講演研究会を開催する。医療とスピリチュアリティの関わりをどう考えるかは、死生学にとって中心的な論題の一つである。宗教や文化に深い関心を寄せる精神科医であるヴェルナー・フート氏とスピリチュアル・ケアの実践に長期にわたって携わって来られたヴァルデマール・キッペス氏のお話をうかがい、有意義な討議のひとときを持ちたい。

日時：１０月３０日（土)、14：00〜16：30
場所：本郷キャンパス　文学部法文１号館　２１５教室

講演者：ヴェルナー・フート氏（精神科医、ミュンヘンにて開業）
解説者：ヴァルデマール・キッペス氏（臨床パストラルケア教育研修センター所長）
通訳：志村　恵氏（金沢大学）

ヴェルナー・フート博士は、精神分析を主な方法とするミュンヘン在住の精神科医である。禅をはじめとする東洋宗教にも深い関心を寄せ、黙想についての著書もある特異な学者だ。日本語に翻訳されている書物としては、『原理主義――確かさへの逃避』（志村恵訳、新教出版社、２００２年、原著、１９９５年）があるが、他に『信仰・イデオロギー・妄想』（１９７８年)、『選択と運命』（１９８２年)、『面会時間　抑鬱症』（１９８４年）などの著書がある。

キッペス博士は、久留米にある臨床パストラルケア研修所の所長を務めるカトリックの神父である。『スピリチュアルケア――病む人とその家族・友人および医療スタッフのための心のケア』（サンパウロ、１９９９年）の著書があり、死に行く人々へのケアを中心に、「医療とスピリチュアリティ」の実践を長らく実践してきた人物で、日本語もたんのうだ。

日本では近年、急速に関心を集めるようになった論題だが、ドイツではキリスト教の伝統を踏まえて、長い歴史をもった論題だ。、現代の宗教者や医師として、深い考察を積み重ねてきたフート、キッペス両氏のお話から、日本の死生学も多々、学ぶことがあるに違いない。

シンポジウム「べてるに学ぶ ―《おりていく》生き方」

上野 千鶴子

開催：１１月５日　13:00 - 15:30　（第一部）　於 東京大学医学部 鉄門講堂
（16:00 - 17:30 第二部は公開されません）

べてるが東大にやってくる！
東大生はべてるの人たちの対極にあるだろうか？
それとも東大生とべてるの人たちのちがいは、紙一重だろうか？
東大生がべてると出会うと、どんな化学反応が起きるだろう。
東大と東大生は、周囲の期待や高い自己評価で右肩上がりの道をつっぱしってきた。
東大生は状況に適応する能力がとても高いが、自分にとって何がいちばん大事かを忘れているように見える。
他方、べてるの人たちは、この世に不適応を起こし、人生の辛酸をなめてきた。だが、人生の価値が、他人の評価ではかられないことを知っている。
「昇っていく」生き方をやめた人たちから学ぶ、「降りていく」生き方。
いま、右肩下がりのニッポンで、わたしたちに必要なのは、降り方のスキルかもしれない。
COE 死生学プロジェクトが贈る、死ぬまでは生きていく人たちのための「脱力系」シンポジウム。

パネリスト　早坂　潔　（べてるの家代表）
河崎　寛　（べてるの家爆発救援隊隊長）
坂本　愛　（べてるの家メンバー）
渡辺瑞穂　（べてるの家メンバー）
川村　敏明　（浦河赤十字病院）
向谷地　生良（北海道医療大学看護福祉学部・浦河赤十字病院ソーシャルワーカー）
伊藤　恵理子　（浦河赤十字病院ソーシャルワーカー）
市野川　容孝　（東京大学国際社会科学）
田口ランディ　（作家）
司会　上野　千鶴子　（東京大学）

「べてるの家」説明文：

「浦河べてるの家」とは、精神障害をかかえた人たちの有限会社・社会福祉法人の名称。北海道浦河町で、共同作業所・共同住居・通所授産施設などを運営しており、事業に参加している人たちの総数は 100 人を超える。

1980 年に回復者クラブ「どんぐりの会」の有志が教会の古い会堂を住居として借り受け発足した（「べてるの家」と名付けられたのは 1984 年）。後に昆布の下請け作業から自前での製造販売を開始、さらには地域での介護用品の販売に取り組み、1993 年には有限会社、2002 年には社会福祉法人を設立した。それぞれの代表は、回復者のメンバーがつとめている。現在、年商 1 億円、年間見学者 1800 人、いまや過疎の町を支える一大地場産業となっている。

幻聴や妄想を語り合う「幻覚＆妄想大会」、精神分裂病者のセルフヘルプグループ「SA」等々、世界の精神医療の最先端の試みが、ここ北海道の浦河という小さな町で既に根を下ろしていたことでも注目を集めている。1999 年日本精神神経学会第 1 回精神医療奨励賞、2003 年毎日福祉顕彰、保健文化賞を受賞。　（『べてるの家の「非」援助論』医学書院の「著者紹介」より抜粋）

シンポジウム「生死をめぐる同意と決定」

一ノ瀬 正樹

「生死をめぐる同意と決定」(Consent and Decision concerning Life and Death)

趣旨

生死に関わる「自己決定権」ということが話題となって久しいが、何でも自分で決断しさえすればすべてが決着する、というものでもない。そうした決断がなされるには、まず医療側が、診断データ、可能な治療の選択肢とそれぞれの予後の見込み、選択肢それぞれのリスクや成功の確率、コスト面の条件、などについての基本要件を踏まえて、最善の道筋についての合理的な意思決定を下し、それを患者に説明し、そして次に患者側が、自分の希望や価値観を踏まえて、やはり合理性に適った同意・意思決定をしていく必要がある。そうでなければ、説明責任を果たせず医療裁判になったり、後悔を残すことになったりしかねないからである。本シンポジウムは、こうした不確実でリスキーな状況下での、生き死にに関する同意形成や、決定のプロセスを主題として、理論的・実際的両面からの問題提起を行う。

第一部「The Philosophy of Facing Uncertainty: Epistemic Limits, Probability, and Decision」では、基礎的な作業として、確率や意思決定に関する理論的・哲学的問題を検討する。人間の認識の限界、確率概念の解釈、ベイズ主義認識論、意思決定理論などがトピックとして言及される予定である。イギリスなどから三人の研究者を招く。

第二部「生き死にの選択」では、前日の成果を踏まえて、実践的見地から、医療についての同意と決定の問題を論じる。医療における意思決定、インフォームド・コンセント、医療裁判、医療経済、などのトピックが論じられる予定である。日本人の研究者による討論形式で行う。

概要は以下のようである。

第一部　12月11日(土)　午前11時より　　於・東京大学文学部一番大教室

「The Philosophy of Facing Uncertainty: Epistemic Limits, Probability, and Decision」
(不確実性に向かうことの哲学：認識的限界・確率・意思決定)

スピーカー　Graham Priest (Philosophy, Melbourne & St Andrews)
Colin Howson (Philosophy, London School of Economics, London)
Donald Gillies (Philosophy, King's College, London)
一ノ瀬正樹（東京大学・哲学）

コメンテーター　加地　大介　（埼玉大学、哲学）
Colin McKenzie　（慶応義塾大学、経済学）
飯田隆（慶應義塾大学、哲学）
繁桝算男（東京大学、数理心理学・ベイズ統計学）
丹治信春（東京都立大学、哲学）

司会　石黒ひで（東京大学）、野本和幸（創価大学）、土屋俊（千葉大学）

第二部　12月12日(日)　午後1時より　　於・東京大学文学部一番大教室

「生き死にの選択」 (Choices about Life and Death)

提題者　鎌江伊三夫（神戸大学、医学・医療における意思決定）
清水哲郎（東北大学、哲学・医療倫理）
鈴木利廣（明治大学、法学・医療裁判）
麻生享志（東京大学ＣＯＥ研究員、哲学・医療経済）

司会　加藤尚武（鳥取環境大学、哲学・応用倫理）

●今後の予定●

ロジャー・クリスプ教授 (St Anne's College, Oxford) 講演研究会

"How to Allocate Health Care Resources:QALYs or the Virtues?"

(医療資源の配分－QALYs か徳か？)

２００４年１０月１４日（木）　１５:００～１７:００

東京大学文学部法文１号館　２１５教室

講演研究会*“Medizin und Spiritualitaet”*

(医療とスピリチュアリティ)

講演者：ヴェルナー・フート（精神科医、ミュンヘンにて開業）

解説者：ヴァルデマール・キッペス（臨床パストラルケア教育研修センター所長）

２００４年１０月３０日（土）　１4:００～１6:30

東京大学文学部法文１号館　２１５教室

公開シンポジウム「べてる に学ぶ――《おりていく》生き方」

１１月５日　13:00 - 15:30　（第一部）

医学部（本郷キャンパス）　鉄門講堂

公開シンポジウム「生死をめぐる同意と決定」

第１部「不確実性に向かうことの哲学――認識的限界、確率、意思決定」

(The Philosophy of Facing Uncertainty: Epistemic Limits, Probability, and Decision)

2004 年 12 月 11 日（土）　11:００～18:30　　文学部　１大教室

第２部　「生き死にの選択」

2004 年 12 月 12 日（日）　13;00～17:00　　文学部　１大教室

詳しくは、ホームページ（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku）でご確認下さい。

●事業推進担当者●

（拠点リーダー）

島薗　進　<宗教学>

（第一部会：死生学の実践哲学的再検討）

竹内　整一　<倫理学・世話人>

熊野　純彦　<倫理学・世話人>

一ノ瀬　正樹　<哲学・世話人>

松永　澄夫　<哲学>

関根　清三　<倫理学>

榊原　哲也　<哲学>

（第二部会：生と死の形象と死生観）

小佐野　重利　<美術史・世話人>

木下　直之　<文化資源学>

大貫　静夫　<考古学>

（第三部会：死生観をめぐる文明と価値観）

下田　正弘　<インド哲学仏教学・世話人>

多田　一臣　<国文学>

市川　裕　<宗教学>

池澤　優　<宗教学>

（第四部会：生命活動の発現としての人間観の検討）

武川　正吾　<社会学・世話人>

横澤　一彦　<心理学>

立花　政夫　<心理学>

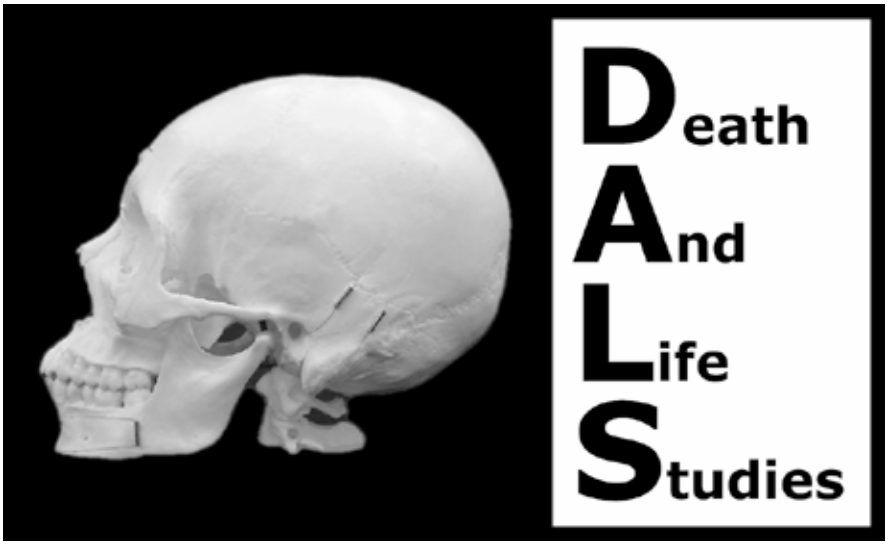
林　徹　<言語学>

赤林　朗　<医療倫理学>

甲斐　一郎　<健康科学>

西平　直　<教育学>

秋山　弘子　<社会心理学>



「DALS ニューズレター」
第７号
平成１６年１０月１日発行
東京大学大学院人文社会系研究科
２１世紀ＣＯＥ“生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”
責任者　　島薗　　進
TEL & FAX 03-5841-3736